秋ウンカ越冬究明の想い出

石　﨑　久　次

北陸病虫研報が誕生して以来，半世紀の節目を迎えた。これを機に小生にも“想い出”の一端を述べて欲しいとの連絡を受けた。早速いままでの会報を一読した。最初に発表したのは，1951年長野で開かれた第３回大会であった。それ以来'88年まで，研究機関在職中30数篇の小論文を掲載させて頂いた。それは水稲害虫が主で重要種の発生生態や防除技術の確立であった。そのうちエネルギーを最もかけた，秋ウンカの越冬究明について述べ，会報発刊50号を賛えたい。

あれは，'52年８～９月のことである。北陸から西日本一帯にかけて秋ウンカが大発生した。当時は，発見が遅れたことと防除剤が少ないため，被害は甚大であった。ことに河北?周辺全域の早世稲では収穫皆無となり火をつけて燃やしたほどだった。予察技術が確立され，しかも農薬が豊富な現在では，考えられない現象だった。しかもこれほど大きな被害を及ぼしたトビイロ（秋ウンカ）であるが，セジロ（夏ウンカ）ともに越冬実態が不明のままだった。そこでこれを機に，農林省は発生予察の特殊調査として，ウンカの越冬究明を実施することになった。

石川もこの調査に参画するようになった。最初は，多発した平坦から山ぞいそして山間とその周辺雑草地を対象とした。調査の結果，秋発生している幼虫は，すべて12月中旬には姿を消した。また夏草に産みこまれた卵は，12月末には全部腐敗し，卵も死亡した。これに比較して山間田の２番稲に産下した卵のみ２月上旬まで生きていたが，その後は卵寄生蜂のみ越冬を完了した。この結果は，セジロウンカも含めて２か年とも同じで失望したものだ。しかし，ニセトビイロなど類似種は，多年生雑草で卵越冬した。しかもこれに由来する１世代成虫はすべて短翅型で，７月発生する成虫は長翅型であった。この調査には遠い路を自転車でガタガタ走ったこと，冬場での山間田調査にはスキーで行ったなど，車社会の現在では味わえない想い出であった。

３年目からは，調査の範囲を広げ，温泉の湧出する周辺や300m以上の山岳地帯を選んだ。ことに白山では，時期別，標高別に調査したところ，８月末になると平地より成虫が多いのに驚いた。登山者のいない10月に入ると，雪が降ったり，夜狼が吠えたりで今思うと懐かしい現象だった。

このようにして1952～'57年の５年間努力したが北陸各県とも同様，秋ウンカの越冬実態は不明のままに終った。それに反して神奈川など冬期暖かいところでは卵越冬を確認したと報じられた。しかし，生態調査の基礎的なことが次々と明らかになったことは大きな収穫であった。それは，石川県に発生するウンカ20数類の発生消長，越冬実態，食餌植物，被産卵植物，産卵痕や卵の識別点，産卵管の形態などである。この成果は，研究会や学会，発生予察の特別報告で発表させて戴いた。この中でも産卵痕の見分け方は，ウンカ類の越冬調査に大いに役立った。また，卵の基部に卵帽がついていてそれが属や種によって異なる点に興味があった。ウンカがふ化するとき，この卵帽を押し上げて幼虫が出てくる。ふ化後には，必ず産卵痕に卵帽が付着しているので，それをルーペで見るだけでそこに発生している種類がわかるから不思議だ。

'63年からは，発生予察の特殊調査としてウンカ・ヨコバイ類の異常飛来現象の解明がはじまった。この頃より再びセジロ・トビイロウンカの海外飛来説が高まり，次々とそのことが証明され予察技術が確立されていった。

ウンカに関する一連の研究をこうして振り返って見るとき，'52年，北陸農試から転勤して来られた，いまは亡き川瀬英爾先輩を忘れてはならない。ウンカの調査に数々ご教示戴いたので，ここにその徳に感謝して想い出の一端を結びたい。